

『弱法師』

上演詞章

シテ	俊徳丸（弱法師）	所	
ワキ	高安通俊（弱法師の父）	時	
アイ	通俊の下人	能柄	
		作者	

四天王寺
春の彼岸の中日
四番目物（男物狂物）
観世十郎元雅

詞章

1〔名ノリ笛〕

〈名ノリ〉

ワキ「これは河内の国高安の里に、左衛門尉通俊と申す者にて候、さてもそれがし子を一人持ちて候ふを、さる人の讒言により、暮れに追ひ失ひて候、あまりに不便に存じ候ふ程に、天王寺にて一七日施行を引かせ候、今日満参にて候ふ程に、なほなほ申しつけ、施行を引かせばやと存じ候

2

〈問答〉

ワキ「いかに誰かある

アイ「おんに候

ワキ「今日満参にてある間、なほなほ施行を引さ候へ

アイ「畏つて候

〈触レ〉

アイ「皆々承り候へ、高安の左衛門尉、我が子のため天王寺において、一七日施行を引かるる、今日は満参にて候ふ間、志を受けんと思ふ者は、皆々参られ候へ、その分心得候へ、心得候へ

3〔一声〕

〈一セイ〉

シテ「出で入りの、月を見ざれば明け暮れの、夜の境を、えぞ知らぬ、難波の海の底ひなく、深き思ひを人や知る

〈サシ〉

シテ「それ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には波を隔つる愁ひあり、沉んや心あり顔なる、人間有為の身となりて、憂き年月の流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思ひも果てぬ心かな、浅ましや前世に誰をか厭ひけん、今また人の讒言により、不孝の罪に沈む故、思ひの涙かき曇り、盲目とさへなり果てて、生をもかへぬこの世より、中有の道に、迷ふなり

〈下ゲ歌〉

シテ「もとよりも心の闇はありぬべし

〈上ゲ歌〉

シテ「伝へ聞く、かの一行程の果羅の旅、かの一行程の果羅の旅、闇穴道の巷にも、九曜の曼荼羅の光明、赫奕として行く末を、照らし給ひけるとかや、今も末世といひながら、さすが名に負ふこの寺の、仏法最初の天王寺の、石の鳥居こなれや、立ち寄りて拜まん、いざ立ち寄りて拜まん

ワキ「皆成仏の大慈悲にシテ「洩れじと施行に連なりてワキ「手を合はせシテ「袖を広げて

〈上ゲ歌〉
地「花をさへ、受くる施行の色々に、受くる施行の色々に、匂ひ来にけり梅衣の、春なれや、難波の事か法ならぬ、遊び戯れ舞ひ謡ふ、誓ひの網には洩るまじき、難波の海ぞ頼もしき、げにや盲亀の我等まで、見る心地する梅が枝の、花の春のどけさは、難波の法によも洩れじ、難波の法によも洩れじ

照らしてくださったとか。いまは末世とはいえ、さすがにここ天王寺は仏法最初の寺としてその仏徳はいまもなお仏徳広大なことで知られています。
すが、名高い石の鳥居はこのあたりでしょう。
か。さあ、立ち寄つて、本尊の救世観音を拜することにしよう。

4 俊徳(弱法師)、通俊の応対

通俊が俊徳を「弱法師と呼び、梅花の呼び方をめぐつて俊徳にたしなめられたりするうち、俊徳は通俊からの施行を袖に受け、さらに難波のどかな春景色を賛美して、それは仏の慈悲の現われだと言つ。

通俊 今日二月の彼岸の中日で、まことどのどかな時節です。また、日よりもよいので、多くの貴賤がこの境内に群集しています。そこでこうして施行をなして、人々に仏への帰依を勧めているのです。

俊徳 これはありがたい観音のお恵みであり、広大なご慈悲だと、人々はこそつてこの施行の場に集まつてきています。

通俊 やあ、ここに出て来た乞食は、いつもの弱法師だな。

俊徳 またまた、わたしたちにあだ名をつけて、みなさんで弱法師とおっしゃっているのですね。たしかにこの身は盲目で、遅い車のようにな不自由な身でよろめきながら歩きまわっているの、弱法師とお呼びになるのはもつともです。

通俊 なんと、この乞食は、ちよつと口にした言葉まで、洒落たことを言う。ともあれ、施行をお受けなさい。

俊徳 これはありがたい。おや、花の香りがします。さては、この花が散りかかっているのですね。

通俊 おお、この籬の梅の花が弱法師の袖に散りかかっている。

俊徳 無粋なことをおっしゃいます。難波津の春であるなら、歌に読まれているように、た

4

〈掛ケ合〉

ワキ「頃は如月時正の日、げに時ものどかなる、日を得てあまねき貴賤の場に、施行をなして勧めり

シテ「げにありがたきおん利益、法界無辺のおん慈悲ぞと、踵を接いで群集する

〈問答〉

ワキ「や、これに出でたる乞巧人、いかさま例の弱法師な

シテ「また我等に名をつけて、皆弱法師と仰せあるぞや、げにもこの身は盲目の、足弱車の片輪ながら、よろめき歩けば弱法師と、名づけ給ふは理なり

ワキ「げに言ひ捨つる言の葉までも、情けありげに聞ゆるぞや、まづまづ施行を受け候へ

シテ「あらありがたや候や、花の香の聞え候、いかさまこの花散り方になり候ふな

ワキ「おうこれなる籬の梅花が、弱法師が袖に散りかかるとよ

シテ「うたてやな難波津の春ならば、ただこの花とこそ仰せあるべきに、今は春もも半ばぞかし、梅花を折つて頭に挿しはさまざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の花の匂ひやな

〈掛ケ合〉

ワキ「げにこの花を袖に受くれば、花もさながら施行ぞとよ

シテ「なかなかの事、草木国土、悉皆御法も施行なれば

3 俊徳(弱法師)の登場、述懐

俊徳は親に別れた悲しみや盲目となった苦しみを述懐しつつ、天王寺にやつてきて、石の鳥居を通つて寺に入る。

俊徳 わたしは出で入る月を見ることができないので、明けても暮れても、夜と昼の境がまつたくつきません。それゆえ、難波の海のように際限なく深いこのわたしの苦しみは、だれにも理解してもらえないことでしょう。

たとえば、「鴛鴦の夫婦は褥をともにしていても、別れる時のつらさを思つて悲しみ、魚の平目の夫婦は枕を並べて寝ていても、波によって仲を隔てられることを心配しているものだ」などと、言われています。鳥や魚でさえそうなのですから、まして、より感情が豊かであるはずの人間の場合は、なおさら夫婦や親子の別れはつらいものです。わたしは人間として生まれて、そのため煩惱にとらわれて、辛い歳月を過ごしてきましたが、いまこうして親子の別れに直面してみると、歌に、「吉野川の流れが吉野山中の妹山と背山のあいだに落ちて二つの山を隔てるように、仲むつまじい男女も別れることがあるのだが、しかしそれが世の中というもの」などと詠まれています。わたしはそういうようにさつぱりと割り切ることはできません。こうなったのも、あさましくも前世で人を憎んだりしたために、その報いで、いまこの世で人の讒言に会い、親から追放されるという不孝の罪を受けることになったのでしょうか。それゆえ、わたしの目は悲しみの涙ですつかり曇り、そのうえ、盲目にまでなつてしまい、まだこの世に生きているうちから、こうして生死のあいだのような闇で迷つているのです。

しかし、このような境遇にならなくても、人にはもともと迷いという心の闇があるのです。

また、伝え聞いているところでは、あの一行程阿闍梨が皇帝玄宗によつて果羅国に流されて、真暗な闇穴道に入ったとき、曼荼羅に描かれているような九曜の星と仏が行く手を輝くばかり

だ、「この花」とおっしゃればよいのです。しかも、いまは春も盛りです。詩に、「梅花を折つて頭にさすと、二月の雪のような梅の花が衣に散り落ちてくる」と詠まれています。いまは、手折つて頭にささなくても、雪のような梅の花が散りかかるほど、花の盛りです。ああ、なんと風情のある花の香りだろう。

通俊 たしかに、「この花」と言うべきでした。その「この花」を袖に受けると、花も施し物のようにみえるではないか。

俊徳 そのとおりです。この世界の草木国土はすべて仏の恵みを示していて、その仏の恵みも、思えば施行といえるものです。

通俊 それゆえ、すべての衆生がその広大な慈悲によつて成仏がかなえられるのです。

俊徳 そこで、わたしたちはその大慈悲に洩れまいと、施行の列に加わつて、手を合わせ、袖を広げて、花も含めて、いろいろな施行を受けるのです。そうして施行を受けていると、梅花が衣に散りかかつて、香ばしい香りがしてきます。この難波は春の盛りで、ここでは、すべてのものが仏法そのもので、たとえば、舞を舞い、歌を歌つて遊び戯れることまでが仏の教えにかなうのです。それゆえ、わたしのような者も、衆生を救おうと誓われた仏のおぼしめしに洩れることはないのです。この難波の海は、そのような頼もしい仏のご誓願を象徴しているのです。じつさい、仏の教えには無縁な盲目のわたしたちまで、仏のお恵みによつて、この春の梅の枝がみえるような気持がします。この難波の春ののどけさは、まさしく仏法の恵みの象徴で、誰もその恵みに洩れることはないはずで

5

〈クリ〉

地へそれ仏日西天の雲に隠れ、慈尊の出世遙かに、三会の暁、未だなり

〈サシ〉

シテへ然るにこの中間において、何と心を延ばへまし

地へここによつて上宮太子、国家を新め万民を教へ、仏法流布の世となして、あまねく恵みを弘め給ふ

シテへ然れば当寺をご建立あつて

地へ始めて僧尼の姿を現し、四天王寺と名づけ給ふ

〈クセ〉

地へ金堂の御本尊は、如意輪の仏像、救世観音とも申すとか、太子の御前生、震旦国の思禅師にて、渡らせ給ふ故なり、出離の仏像に応じつつ、いま日域に至るまで、仏法最初の御本尊と、現れ給ふおん威光の、まことなるかなや末世相応のおん誓ひ、しかるに、当寺の仏閣の、御造りの品々も、赤梅檀の靈木にて、塔婆の金宝に至るまで、閻浮檀金なるとかや

シテへ万代に、澄める亀井の水までも

地へ水上清き西天の、無熱池の、池水を受け継ぎて、流れ久しき代々までも、五濁の人間を導きて、済度の船をも寄するなる、難波の寺の鐘の声、異浦々に響き来て、あまねき誓ひ満潮の、おし照る海山も、皆成仏の姿なり

5 俊徳(弱法師)の述懐

俊徳は天王寺の石の鳥居あたりに佇み、聖徳太子の建立になる天王寺の由来、天王寺の亀井の水の源が天竺の無熱池であることなどをひとりごち、夕鐘が響きわたる一帯が浄土のような景観を呈しているとして、仏の恵みを賛嘆する。

俊徳　　いつたい、釈迦が天竺でお隠れになったあと、この世に弥勒菩薩が出現して、衆生済度のために行うことになっている三つの法会はまだはるか先のことです。

とすれば、この二仏の中間においては、どのようにして悟りを得ればよいというのでしょうか。そこで、聖徳太子が国を改革し、仏法を広めて万民を教化して、仏法を広く浸透させ、仏のお恵みを国中に広げられたのです。

太子はさらにこの寺を建立されて、はじめて僧尼を置いて、四天王寺と名づけられたのです。この寺のご本尊は如意輪観音で、救世観音とも申しあげています。太子のご生前は中国の慧思禅師でいらっしやるので、太子がわが国にお生まれになるのに合わせて、この観音も日本にお渡りになり、それで、今はこの日本の仏法最初の寺院である天王寺のご本尊として、顕われなされたのです。そのご威徳はまことにあらたかで、この末世にふさわしいものでございます。それゆえ、当寺の伽藍建築の材料も香木たる赤梅檀の靈木を用いていて、五重の塔の九輪にいたるまで、すべて最上の閻浮檀金を用いているということですよ。

また、創建以来、未来永劫にわたって澄んだ流れをみせている当寺の亀井の水も、その水源は清らかな天竺の無熱池の水で、この水によって、未来永劫に汚辱にまみれた人間を導いて、衆生を救つてくださるのです。そのようにありがたい天王寺の鐘の音が難波の浦々に響きわたると、すべての衆生を救おうという仏の誓ひが一带に遍満して、夕日を受けて照り映えている海山も、みな成仏の様相を呈しています。

6

〈〆〉

ワキ「これなる者をいかなる者ぞと存じて候へば、それがしが失ひたる子にて候、思ひの余りに盲目となりて候ふはいかに、あら不便と衰へて候ふや、昼は人目もさすがに候へば、夜に入りそれがしと名乗り、高安へ連れて帰らばやと存じ候〔掛ケ合〕

ワキ「いかに弱法師、日想観の時節なり、急いで参り候へ

シテ「げにげに日想観の時節なるべし、盲目なればそなたとばかり　へ心あてなる日に向ひて、東門を拜み南無阿弥陀仏

ワキ「やあ東門とは謂はれなや、ここは西門石の鳥居よ

シテ「あら愚かや天王寺の、西門を出でて極楽の、東門に向ふは僻事か

ワキ「げにげにここも難波の寺の、西門を出づる石の鳥居の

シテ「阿字門に入つて

ワキ「阿字門を出づる

シテ「弥陀の御国も

ワキ「極楽の

シテ「阿字門に入つて

シテ「東門に、向ふ難波の西の海

地へ入り日の影も舞ふとかや

6 俊徳(弱法師)、通俊の応対

通俊は弱法師がわが子であることに気づくが、人目をはばかって素知らぬ風を装い、俊徳に夕日を拝するよう勧める。

通俊　この者は何者かと思っていたが、わたしが家から追い出したわが子ではないか。悲しみのあまり、なんと盲目となつている。ああ、気の毒に、ひどくやつれている。しかし、さすがに明るいうちは人目がはばかれるので、夜になつてから父だと名乗つて、高安へ連れて帰ろうと思ひます。

これ弱法師よ、日想観の時刻だ。急いでここに参れ。

俊徳　いかにも日想観の時刻のようです。盲目ゆえ、そちらのほうかと、あて推量で夕日に向かつて、東門を拝することにしよう。南無阿弥陀仏。

通俊　なんだつて、東門とはおかしなことを言う。ここは石の鳥居近くの西門ではないか。

俊徳　ああ、なんと愚かなことを言われるのか。天王寺の西門を出ると、極楽の東門に向かうと言われているのは間違ひですか。

通俊　いやいや、そのとおりだ。この難波の寺の西門を出ると、そこは石の鳥居…。

俊徳　わたしは、その尊い阿字門のような石の鳥居から寺に入つてきたのです。

通俊　その尊い門である石の鳥居を、そなたはこんどは出て…。

俊徳　ええ、その向こうには、阿弥陀のみ国があるのです。

通俊　それは極楽世界…。

俊徳　その東門に向かつているこの難波の西の海では、夕日の光も、極楽を思わせるように、舞うようにして沈みかけています。

7

〈〆〉

シテ「あら面白や、我盲目とならざりしさきは、弱法師が常に見馴れし境界なれば、なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹き、永夜の清宵何のなす所ぞや

《イロエ》

〈ワカ〉

シテへ住吉の、松の隙より、眺むれば

地へ月落ちかかる、淡路島山と

〈中ノリ地〉

シテへ詠めしは月影の

地へ詠めしは月影の、いまは入り日や、落ちかかるらん、日想観なれば曇りも波の、淡路絵島、須磨明石、紀の海までも見えたり見えたり、満目青山は心にある

シテへおう、見るぞとよ、見るぞとよ

〈ロンギ〉

地へさて難波の浦の致景の数々

シテへ南はさこそと夕波の、住吉の松影

地へ東の方は時を得て

シテへ春の緑の草香山

地へ北はいづく

シテへ難波なる

地へ長柄の橋のいたづらに、かなたこなたと歩く程に、盲目の悲しさは、貴賤の人に行き逢ひの、転び深い難波江の、足もととはよろよろと、げにもまことの弱法師として、人は笑ひ給ふぞや、思へば恥かしやな、今は狂ひ候はじ、今よりは更に狂はじ

7 俊徳(弱法師)のハタラク

俊徳は難波の海に沈もうとしている夕日や西の海の致景を心眼で見つ興奮のあまり境内を歩きまわるうち、行き来の人にぶつかつて転んでしまい、われに返つて思わず心を乱したことを反省する。

俊徳　ああ、すばらしい風景です。この景色は、わたしが盲目となる前に、常に見慣れていた景色なので、目はみえずとも、よく分かるのです。月が難波の海を照らし、松風が吹いている、この清らかな春の長夜の景色を前にすると、なんの邪念も起こりません。

《俊徳は沈みゆく夕日を眺めることができた興奮のあまり、境内を歩きまわる》

俊徳　歌に、「住吉の松の林のあいだから難波の海をみわたすと、淡路島のあたりに月が落ちかかっている」と詠まれています。それは月が落ちるようですが、今は夕日が落ちかかっているのでしょうか。いまは極楽浄土を心に念じる日想観を行つているので、目は見えなくても、淡路島や絵島、須磨明石、それに紀伊の海までも、曇りなくはつきりとみえます。すべて美しい景色は心の内にあるのです。

ああ、みえる、みえる。

また、この難波の浦には数々の致景があります。まず、南にはさすがといわれている住吉の松、東には季節柄、春の緑に映える草香山、北はどこかといえば、難波の長柄の橋があります。そうして目的もなく、あちらこちらと歩きまわるうちに、盲目の悲しさで、参詣の貴賤の人にぶつかつて、転んでしまいました。足元がよろよろとしているのを見て、なるほどほんとうに弱法師だと言つて、人々は笑つていられるではないか。思えば恥ずかしい。もう、興奮して興じたりはするまい。これからはもう、けして興じたりはするまい。

8

〈ロンギ〉

地へ今ははや、夜も更け人も静まりぬ、いかなる人の果やらん、その名を名のり給へや

シテへ思ひ寄らずや誰なれば、我がいにしへを問ひ給ふ、高安の里なりし、俊徳丸が果なり

地へさては嬉しや我こそは、父高安の通俊よ

シテへそも通俊は我が父の、そのおん声と聞くよりも

地へ胸うち騒ぎ呆れつつ

シテへこは夢かとして

地へ俊徳は、親ながら恥かしとて、あらぬ方へ逃げ行けば、父は追ひ着き手を取りて、何をかつつむ難波寺の、鐘の声も夜まぎれに、明けぬさきにと誘ひて、高安の里に帰りけり、高安の里に帰りけり

『弱法師』鑑賞のために ― 詞章・現代語訳についてのメモ

◆この『弱法師』の詞章は観世流のものです。ワキの詞章は下掛り宝生流、アイの詞章は和泉流のものに拠つています。

◆【名ノリ笛】【一声】は人物の登場楽(出囃子)です。

◆詞章冒頭の〈下ケ歌〉〈上ケ歌〉〈セイ〉〈クリ〉〈サシ〉〈クセ〉などは、当該箇所の曲節の名称です。また、〈〆〉は名称をつけるほどではない節を仮にこの形で表したものです。

◆詞章でへが付された箇所は韻文のフシ、「が付された箇所は散文のコトバです。

◆掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。

◆詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、

①シテのセリフ、②ワキのセリフ、③叙事文(小説で言えば「地の文」)の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。

また、③叙事文の箇所の現代語訳は二字下げにしてあります。